

令和 3 年 10 月 20 日現在

機関番号：23201

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K19851

研究課題名（和文）子宮頸がん検診受診率向上を目指した看護職対象のスミアテイカー養成プログラムの開発

研究課題名（英文）development of training nurses to perform cervical screening program for increasing screening uptake

研究代表者

工藤 里香（KUDO, RIKA）

富山県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：80364032

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：子宮頸がんの知識、細胞診断、細胞採取の技術、快適な検診環境等、子宮頸がん検診を実施するための知識・技術・態度を看護職が獲得するための3日間からなるプログラムを開発した。本プログラムを計4回実施し29名が参加した。細胞サンプル採取の結果、参加者すべて扁平上皮・円柱上皮境界からの正確な採取ができていたことから、看護職が子宮頸がん検診を実施することは、本プログラムの実施によって可能であることが示された。さらに、看護職として女性が検診を受けやすいと感じるためのケアを身につけることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プログラムの特徴は、看護職、医師、臨床検査技師など多職種が連携して取り組んだこと。検診受診者がまた受診したいと思うことができる、羞恥心やプライバシーに配慮し、快適かつ正確な検診の実施ができる看護職を育成することを目的としたこと、である。プログラムの参加者は受診者に配慮した検診を実施することができる知識や技術を身につけることができた。本プログラムを広く普及することで、細胞採取そのものを実施することができずとも、検診受診者へのケアはより良いものとなり、実際に実践している参加者が多数みられる。

研究成果の概要（英文）：The program took place over three days in two cities. The total number of participants was 29. It consisted of two parts; theory and practical. Lectures were given on: history of and issues with the Japanese screening program; overview of Japanese cervical screening guidelines; role of screeners and nurse-specific care accompanying gynecological examinations; anatomy and physiology of pelvic organs; interpretation and understanding of cytology results; health education and its role in screening uptake; and global HPV vaccine implementation and how it affects screening. There were no inadequate smears. Nurses felt confident performing Pap smears. No inadequate smears were taken and knowledge increased significantly by this program. This suggests nurses may have an important role to play in increasing screening uptake and reducing the burden of cervical screening in Japan.

研究分野：母性・女性看護学

キーワード：スミアテイカー 子宮頸がん検診 看護職

## 1. 研究開始当初の背景

子宮頸がんは、がん検診にて発見しやすいがんであり、早期治療により死亡率を下げるができると言われていたにもかかわらず、何故受診率が低いのか。工藤ら(2014)の日本における婦人科受診を妨げる要因の文献検討では、日本の女性は内診等の婦人科受診に特有の診察に対して過度の羞恥心を持っている。また婦人科検診の重要性が健康教育として提供されることが少ないため、悪化する可能性のある婦人科疾患と直接的結びつきにくい症状では、羞恥心が勝り、受診の先延ばしにつながっている。日本の婦人科は産科と併設が多く、婦人科検診での受診の敷居を高くし、また婦人科特有の内診を含む診察環境がプライバシーを十分守るものとなっていない。産婦人科医の男性医師比率は71%と高く、受診者の多くは希望する女性医師の診察を受けにくい。特に思春期や青年期の受診に関しては、受診者の母親の意見が影響する。母親自身の産婦人科受診経験がよければ娘にも受診を勧めるが、悪い場合は娘の受診の妨げとなる。つまり、医療者側の適切な支援の欠如が、子宮頸がん検診受診率を下げる大きな要因である。

同様の状況を、海外では、スミアテイクヤーとして医師以外の医療従事者が検体採取することで解決している(田淵、2012)。スミアテイクヤーは、一部の臨床検査技師が担うこともあるが、婦人科領域にかかわる看護師や助産師であることが一般的である。スミアテイクヤーというポジションの確立の裏には多忙な医師の業務を減らす目的もあったが、現在では女性である検診受診者をつなぎとめる役割も果たしている(田淵、2012)。2016年4月に国会答弁にて「医師の指示の下で子宮頸がんの検査のために膣内から細胞を採取することは診療の補助に該当し、看護師が当該行為を業として行うことは可能である」と示された。この答弁により、子宮頸がん検診を行うクリニックにて医師の指示の下、女性である看護師がきめ細やかな配慮をもって、スミアテイクヤーとして子宮頸がん検診を実施することができることとなった。

## 2. 研究の目的

子宮頸がんは、子宮頸部へのヒトパピローマウイルス感染により発生する悪性腫瘍で、女性生殖器がんの中では最も頻度が高い。しかしながら、子宮頸がん検診未受診者は約75%、20歳代では82%と高率である。検診未受診の理由に羞恥心と検査を実施する医師が男性であることが挙げられている。

そこで本研究では、医療従事者かつ女性である看護職を対象とし、細胞診検査を行うスミアテイクヤー養成プログラムの開発を目的とした。

## 3. 研究の方法

(1)研究デザイン：本プログラム受講によるスミアテイクヤーとしての知識・技術・態度の達成度を評価する、プログラム評価研究。

(2)対象者：スミアテイクヤーに興味のある看護職。

(3)事前調査：研究参加募集時に、年齢や看護職経験等の基礎情報、プログラム参加理由のアンケートおよび知識の確認を実施した。

(4)プログラムの実施：3日間のプログラムを実施した。内容は、日本における子宮頸がん検診の背景と問題点、日本および海外におけるHPVワクチンの動向、子宮頸がん検診ガイドラインの概要、女性の健康と生活 - 今後の婦人科受診につながる健康教育、スミアテイクヤーの役割と婦人科検診に伴う看護、細胞診断結果の解釈と理解、骨盤内臓器の解剖学と生理学、細胞サンプル採取の手技と実施

(5)細胞サンプル採取トレーニング：プログラムで示した「細胞サンプルの採取の手技と実施」をトレーニングの中心とした。本トレーニングは、実際に細胞サンプルを採取し、さらに正確に採取できているかを評価する必要がある。その方法として

(ア) トレーニング指導者の指導の下、子宮頸がん採取モデルを用いて、細胞採取のトレーニングを行う。

(イ) トレーニング指導者の監視の下、参加者同士で細胞サンプル採取を行う。細胞診実施場所は常に感染予防を実施している。病院内とする。

(ウ) 扁平上皮 - 円柱上皮境界から細胞の採取ができているか否かをもって、「適正標本の採取ができる」とする。

(エ) 細胞診採取の前後の対応を、採取を受けたものが快適と感じる対応であるか、参加者、研究者とともに評価する

(6)事後調査：プログラム参加を終えて得たことを自由記載してもらった。知識の確認を実施した。

(7)(5)の検査結果を中心に、事前・事後調査、研修中の知識・技術・態度を用いて、プログラムの効果を評価した。

## 4. 研究成果

(1)参加者の概要

2018~2019年度、合計4回のプログラムの合計の参加者は29名(看護師3名、保健師2名、助産師24名)内研究対象者は27名であった。研修参加の動機としては、女性の健康向上に寄与したい、子宮頸がん検診の受診率を上げたい、自分の専門性を深めたい、といった意見が見られた。

## (2)プログラムの詳細

日本における子宮頸がん検診の背景と問題点(工藤):現在の日本における子宮頸がん検診を妨げるもの、問題点について講義を行った。日本および海外におけるHPVワクチンの動向(ハンリー):世界における子宮頸がん検診、HPV検査、HPVワクチンの接種状況およびHPVワクチン接種が実質中止となっている日本の今後の子宮頸がん罹患率の予測などについての講義を実施した。子宮頸がん検診ガイドラインの概要(工藤):ガイドラインについて講義を行い、子宮頸がんについての知識を深めた。女性の健康と生活-今後の婦人科受診につながる健康教育(鈴木):女性の健康に関する政策が遅れるのは何故かを考えるとともに、健康教育についての講義を行った。スマアテイカーの役割と婦人科検診に伴う看護(鈴木):女性が快適に受診するために必要なことを、参加者ととも考えながら演習を行った。細胞診断結果の解釈と理解(加藤、吉田):細胞検査技師の立場から、細胞診断の結果を的確に読み取ることができるために講義を行った。骨盤内臓器の解剖学と生理学(工藤):診察やカウンセリングに必要な解剖学と生理学の復習を行った。細胞サンプル採取の手技と実施(江夏、早乙女):産婦人科医による女性の健康に関する知識の再確認と子宮頸がん検診の実際の講義、細胞サンプル採取の手技を演習し、医師の指導の下サンプル採取を実施した。

本プログラムの特徴は、看護職、医師、臨床検査技師など多職種が連携して取り組んでいること、女性が検診を受けやすいと感じるためのケアを身につけることを目標としていることである。

## (3)事前事後確認テスト(2018年度の結果)

子宮頸がんの知識に関しては、子宮頸がん検診ガイドラインを中心に事前事後テストを実施し、プログラムの効果指標の一つとした。事前テストの正答率は、細胞採取に適した位置:11%、採取に適した器具:76.5%、適切な検体採取:29.4%、適切な検診受診間隔:57.6%であった。3日間のプログラム実施後の事後テストの正答率はそれぞれ、82.4%、76.5%、82.4%、80.6%と上昇した。

## (4)検診に対する態度

子宮頸がん検診や診察台を用いた処置に関して、プログラム実施前は「なるべく早く実施する」というスピードが羞恥心を下げるといった意見が多かった。プログラム実施後は、受診者に明確に説明を行いながら丁寧に実施する、受診者の悩みに対応できることが大切であるという、カウンセリング力に重きをおいた意見が多く見られた。実際に細胞サンプル採取を行うときにも、参加者同士で採取者の態度を評価したが、声掛けが丁寧である、安心感がある、何でも話せる雰囲気があった、など高い評価であった。

## (5)細胞サンプル採取

細胞サンプル採取に関しては、綿棒による採取を実施している自治体もまだあるが、ブラシ採取が主流となっていること、ブラシ採取の方が正確な細胞採取ができることが明らかであることから、ブラシ採取とした。検体は、直接塗抹法、液状法の2種類で検査した。

検体はすべて適正検体であった。

## (6)プログラムの成果

参加者の多くは助産師であり、日常的に婦人科外来で子宮頸がん検診の補助についているものは少なかった。そのため、子宮頸がんに関する知識やガイドラインについての知識が十分ではなかった。しかし、講義や演習を通して、知識を定着することができた。

細胞診の検査技術は向上しており、短い時間でのトレーニングにより的確な技術を習得できる事が示された。

日本では羞恥心が受診の妨げになっていること、受診者に子宮頸がんの知識が少ないこともあり、その部分に対応できる看護職のスマアテイカーが、これからの子宮頸がん検診受診率の向上に寄与することが示唆された。

看護職が子宮頸がん検診を実施することは、本プログラムの実施によって可能であることが示された。さらに、看護職として女性が検診を受けやすいと感じるためのケアを身につけることができた。

## (7)今後の課題

子宮頸がん検診受診率向上には、まず検診を受ける、婦人科に行く行動をとることである。その行動要因は母親や友人からの「受診してよかった」という後押しや間接的受診勧奨(上田豊、2018)である。そして受診することで正確な知識を得て、その後の受診行動も促されることが重要である。つまり、女性自身が継続して必要に応じて受診することが必要である。そのためには、検査を実施する者が「正確な検査」「快適さ」「生活に即した健康教育」を「継続的に」提供することが必須である。本プログラムは基礎教育であり、正確な検査、快適さ、教育については身につけることができたが、参加した看護職そのものの子宮頸がん啓発教育でもあり、継続性に発展することは難しかった。今後、継続的に知識・技術のブラッシュアップをし、継続的に子宮頸がん検診を担当するために、「看護職が継続して子宮頸がん検診を担当するために必要なことは何か」が課題となる。

<引用文献>

上田豊、女性がん検診の現状と今後の展望 子宮頸がん検診の受診勧奨に有効な手法は?、日本がん検診・診断学会誌、26巻1号、51、2018

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 工藤里香、Hanley B.J. Sharon、江夏亜希子、早乙女智子、鈴木幸子
2. 発表標題 INCREASING SCREENING UPTAKE: TRAINING JAPANESE NURSES TO PERFORM CERVICAL SCREENING
3. 学会等名 EUROGIN2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 工藤里香、鈴木幸子、早乙女智子、江夏亜希子
2. 発表標題 看護職によるスミアテイクー養成プログラムの検討 ~子宮頸がん検診受診率を上げるために~
3. 学会等名 性と健康を考える女性専門家の会総会シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sharon Hanley、工藤里香、常田裕子、兵藤絵美、宗百合子、早乙女智子、江夏亜希子、吉野一枝、鈴木幸子
2. 発表標題 子宮頸がん検診受診率向上を目指した看護職対象のスミアテイクー養成プログラムの開発の意義
3. 学会等名 北海道公衆衛生学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	Hanley Sharon  (Hanley Sharon)  (80529412)	北海道大学・医学研究院・特任講師    (10101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 幸子  (Suzuki Sachiko)  (30162944)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授    (22401)	
研究分担者	兵藤 絵美  (Hyodo Emi)  (50795599)	京都橘大学・看護学部・助手    (34309)	
研究分担者	宗 由里子  (Mune Yuriko)  (50756286)	京都橘大学・看護学部・助教F    (34309)	
研究分担者	常田 裕子  (Tokita Yuko)  (40622486)	京都橘大学・看護学部・准教授    (34309)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	江夏 亜希子  (Enatsu Akiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------